

ミラノ

「フェルトリネッリ財団」設計=ヘルツォーク&ドムーロン

建築と歴史 フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌 pp.4-25

脳味噌を働かせるほうが精神科医に委ねるより好ましい——その例証がほしい人は、フェルトリネッリの書店に行って、カルロ・フェルトリネッリの著書『Senior Service』[邦訳書:『フェルトリネッリ』、麻生九美訳、晶文社、2011]を手に入れるしかない。この本の中でフェルトリネッリは、彼の父のことを語っている。カルロが父について書き始めた時は「ジャンジャコモ・フェルトリネッリを地獄に送るべき数えきれないほどの理由」があったが、その人生を語るため慎重に資料に当たり、自分の家族の歴史を辿り直したうえで、迷いのないアイロニーを込めて明晰に記述した。フェルトリネッリ家は、19世紀にはすでに非常に裕福で、20世紀初頭にはローマとミラノで多くの不動産を所有していた。一族の所有地の中には価値の高い土地もあった。当時も現在と同じく、所有地の片側はバズビオ通りに、反対側は

フランチェスコ・クリスピ通りに面している。幅の狭い端部は、テナリア門の税関吏宿舎の背面に位置する。第二次世界大戦中にミラノが爆撃を受けてこの一帯に並んでいた建物が無くなると、戦後に苗木屋が店を構えた。現在は、温室の代わりにジャンジャコモ・フェルトリネッリ財団の建物が聳えている。今では当然に思えるが、『Senior Service』が1999年に出版された時は最後の章が欠けていた。ジャンジャコモ・フェルトリネッリは、最後にイタリアに帰国する前に、息子カルロにかかわる問題をいくつか解決するためスイスのティチーノ州に赴いた。1972年3月15日、カルロ自身が書いているように、彼はルガーノでイライラしながら、むなしく父を待った。その父は前日の夜にこの世を去っていた。フェルトリネッリ財団が新たな本拠地を得た今、『Senior Service』の最終章も書き上げられた。円環は閉じられた。そうなってしかるべきだったことは、カルロ・フェルトリネッリの本の中で最も素晴らしいページを読めば納得できる。彼の父が作った財団は、「関連する文献、資料、記録を収集する大変な仕事を実行せずに、労働運動を研究するのは不可能である。そうし

配置図:初期案



た単純なアイデア」の産物だった。カルロ・フェルトリネッリは、財団のことを貴重な記録史料の避難所と呼ぶ。『百科全書』(1751-72)の初版に並んで、サン=シモンの『産業』(1815)、マルクスの書簡とエンゲルスの備忘録、『Die Neue Zeit』の全号、25万冊の書物を所蔵する財団は、「あらゆる図書館と同じく、その建物、その内在的な合理性、その予見不可能さなどの魅力を有し、セピア色のイ

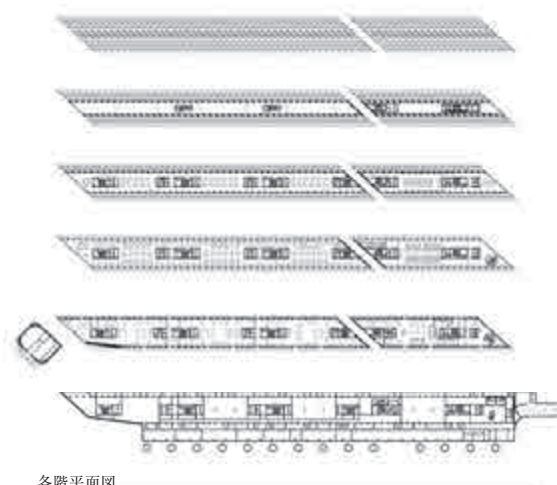


全景:交差点側より見る

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。
copyright© 2007-2017 Arnoldo Mondadori Editore
copyright© 2007-2017 Architects studio Japan

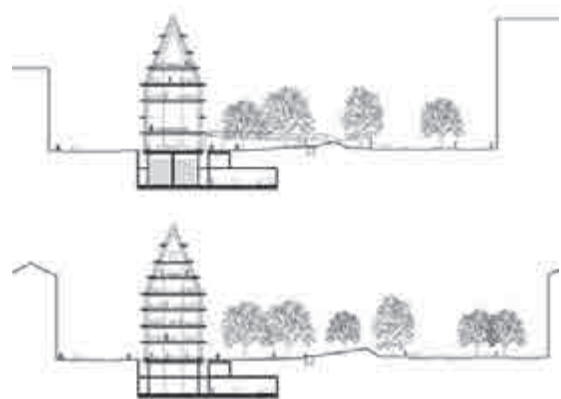
ンクの入り組んだ線を思わせる道程を辿った」——この点は、パズビオ通り沿いに、アパートメントや庭を飾るための苗木の温室に代わって、カルロの父が創設した財団の本部となる壮麗で「入り組んだ」建物が聳えるに至った理由の単なる説明以上の意味を持つ。

財団ビルの最も幅の狭いファサードには、ライン地方特有のファッハヴェルクハウス(木骨造建築[コロンバージュ])の輪郭を再現したフレームに大きなガラス壁が嵌められている。そこに「ジャンジャコモ・フェルトリネッリ財団」の文字が浮き上がる。美しいエントランスをくぐると、じつに心地よく人を引き込む閲覧室に入る。これまで人々が本や資料を読んでいたロマニョージ通りの旧財団閲覧室とまったく異なっている。1階のフェルトリネッリ書店はカフェテリアでもある。地方に住む人々にとって「フェルトリネッリ」の店舗が夢のような存在だった頃から時代は変わったのだ。建物の大部分は現在マイクロソフト社の本部オフィスになっている。マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』の初版を所蔵する「社会主義の歴史のための学術研究機関」の本部と、ビル・ゲイツが設立した企業の成功を司る



各階平面図

オフィスとの、興味深い結婚である——1956年から財団図書館長を務めているジュセッペ・デル・ポーとフェルトリネッリ社を長らく経営してきたロマーノ・モントローニには想像もつかなかった関係であるが、どんな都市も驚きの種にしてしまうような異業種連携はごまんとあり、それらとよく似ている。



断面図

落成後のフェルトリネッリ財団の建物は、近年ミラノの姿を変えるのに貢献してきた多くの建物の列に加わった。ミラノは「イタリアで唯一ヨーロッパの雰囲気のある都市」になったとよく言われるが、これはピエンツァの住人が——一例を挙げれば——教皇ピウス2世とベルナルド・ロッセリーノに多くを負う[計画的なルネサンス]都市で暮らすことに息苦しさを覚えるはずだと暗に示すに等しい。しかしまたこの種の「ヨーロッパ的である」は常套句のひとつでもあり、あらゆる常套句と同様に、そう形容される事実や出来事の本来の意味をより分かりにくくしてしまう。これまで示唆されてきたように、フェルトリネッリ財団新本部の建物は、ミラノを時代の足並みに揃えさせたとと言われる——賞賛すべき事例は少ないが——数多くの建設計画とは何ら共通点のない歴史と出来事の結果なのである。また、建築主および建築家たち——この特性を解釈し命を吹き込むよう委ねられた——の功績なのである。

ただし、現在われわれが目にしていない建物は不完全である。計画ではパズビオ通りに面した長いヴォリュームと別に、アレッサンドロ・ヴォルタ通り沿いに第2のウイングの建設が予定されていたが、その運命は知る由もない。この2つめのウイングは先に建設された建物と似た外観を持つはずで、おそらく、その意図も妥協のない配置も説明してくれるはずだった。テナリア門に建つ19世紀の税関吏宿舍の背後で、2つの建物は都市への新たなアクセス口を形づくり、それにふさわしい機能を帯びるはずだった。さらに、ヴォルタ通りに面したウイングの接地面は、矩形を潰した台形に相当する輪郭となるはずだった。それが建設されていたら(あるいは今後建設されたとしたら)、パズ



全景: クリスビ通りに沿ったファサード



クリスビ通りより見る



パズビオ通りより見る

- 邦訳書：村上光彦訳、みすず書房、I-2巻、1985年
- 2——フェルナン・ブローデル『資本主義の活力』、1976年 | 邦訳書：『歴史入門』、金塚貞文訳、太田出版、1995年
- 3—— R. Camagni e A. Pio, “Funzioni urbane e gerarchia metropolitana europea: la posizione di Milano nel sistema dell’ Europa centro-meridionale (都市機能とヨーロッパ大都市ヒエラルキー：中南部ヨーロッパ体系におけるミラノの位置),” A. Predetti e R. Camagni (a cura di), *La trasformazione economica della città*, IRER-Progetto Milano, Franco Angeli, Milano 1988.
- 4—— 研究成果は直後にフランスで行われた同様の権威ある研究によって確定された。RECLUS/DATAR, *Les villes « européennes »*, La Documentation Française, Paris 1989.
- 5—— 以下を参照されたい。PwC – The Urban Land Institute, *Emerging trends in real estate: Europe 2016, beyond the capital*, 2016.
- 6—— 以下の記事も参考になる。M.C. Gibelli, “Milano: lost in transformation,” Eddyburg.it, 20 maggio 2016.
- 7—— この種のリターン の例は多数ある。マイクロソフト社は間もなくボルタ・ヴォルタに新築されるフェルトリネリ財団ビルに拠点を移し、パスキエラ・ボッロメーオの社屋を離れる。サムスン社はロレンテッジョの拠点からボルタ・スオーヴァの「ダイヤモンド」ビルに本部を移す。BNPパリバ銀行もロモロの本拠を捨てて同じ物件に転居中である。ファストウェブ社は郊外地区に本社機能を置いた多くの先例を廃して、シンピオーシス地区に集中させる。金融危機に続くミラノでの大きな価格下落が、労働の新編成において企業が 必要な空間が削減されたこととともに、この再集中化を助けたことは確かだ。
- 8—— この考察は、2016年5月23–24日にパリで開催されたシンポジウム「拡大パリとヨーロッパにおける大都市戦略」にて筆者が行った基調講演の中で発表された。
- 9—— 近年のロンドン戦略計画とこれについてグラン・パリの技術者らが行った興味深い読解を参照されたい。
- 10 / 本誌 p.31 の図表 —— 2011年の最新の国勢調査において、ISTAT (政府中央統計局)はこの分野の定義と名称を変更した。われわれが関心を寄せる、前回調査との絶対的変化とパーセンテージの変化は、業界の相応の定義に基づいて算出される (したがって、2001年とは異なる2つの価値に基づく)。ただしデータから抽出できる絶対的な変化を、当初の価値を割り出すために考慮すべきではない。
- 11 —— このメッセージは、国際経済政策の鋭い観察者で批評家であるジョセフ・スティグリッツも強調している。以下の文献を見られたい。J. Stiglitz, *The great divide*, W.W. Norton & Co., New York 2015.

「ボッコーニ大学」設計=妹島和世+西沢立衛 / SANAA

多様性の約束 カミッロ・マーニ

参照 | 本誌 pp.32-39

ミラノのボッコーニ大学は、同市にある大規模文化機関のひとつである。同大学は重要な経済学者や政治家を輩出し、その多くは20世紀からイタリア共和国の歴史を作る主人公として活躍している。ボッコーニ大学は、組織的發展とキャンパスの物理的・環境的な発展を常に連携させてきた。過去には、ジュゼッペ・パガーノ (サルフェッティ通りの大学キャンパス、1937)、ジョヴァンニ・ムーツィオ (寄宿舎と図書館、1956)、イニャーツィオ・ガルデッラ (楕円形の建物、2001) という、ミラノ文化に最も影響力のある建築家たちを巻き込んだ。

その後、建築家の選定手段として国際招待設計競技が導入された。2005年の設計競技ではグラフトン・アーキテクトが大学拡張計画の実現を任された (『CASABELLA』768号)。2012年に再び行われた設計競技では、近隣の牛乳工場の廃業と跡地の獲得によって可能になった新たな拡張計画の実現に、日本のSANAA (妹島和世+西沢立衛) の案が選ばれた。2013年から2016年にかけて建築許認可と実施設計の段階が進められ、2016年末には建設工事が始まった。

『CASABELLA』の読者は、実現した建物を説明する写真や記述を通してプロジェクトを考察するやり方に慣れ親しんでいる。しかしながら、近年のミラノの変化を熟考する機会となることと本作の重要性を鑑みて、本誌編集部は現在の着工段階で設計案を取り上げ、作品の詳細な考察は完成後に先送りすることとした。

SANAAの設計案は、教育スペース、教員用スペース、学生寮と余暇活動のためのスペースの必要性に応じており、周囲の環境からラディカルに逸脱した5つの建物の建設を想定している。キャンパスのある一画がもつ19世紀的特質は、自由な建築によって否定された。その湾曲したフォルムはSANAA建築を特徴づけるフォルムの探求を指し示す。この拡張計画が呼び起こそうとするものが大学キャンパスに典型的なパヴィリオン型建築であるとすれば、他方では、建物の密集した状態は周囲の都市的性質を想起させ、建築どうしを軽く触れ合わせることによって驚くべき圧縮と膨張を生む。緑地の整備された屋外空間は、隣接するラヴィッツァ公園との連続性を帯び、一連のキャノピーによって屋内通路を明示したりキャンパスのブロックと外縁部分の関係を仲立ちしたりする。

講義室と教員のスペースが置かれる3つの建物は、幅の狭いヴォリュームを互いに触れ合うように展開することによって中庭の原理を再解釈したものだ。驚異的なまでに蛇行するヴォリューム群の内側の輪郭は、外側の輪郭



スタディ模型

工房、アトリエ、 小ミュージアム： アーティストの空間と場

「アトリエ・コレア」設計=スミルハン・ラディック

限界の実践 ジョヴァンナ・クレスビ

参照 | 本誌 pp.58-65

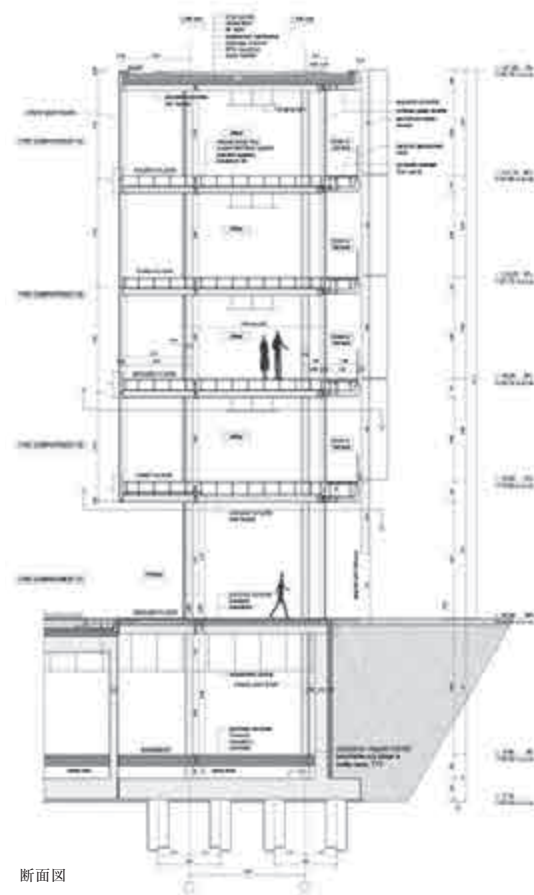
周壁と天幕が1つずつ、それだけである。チリはマウレ州にあるビルチェスの手つかずの自然の中に、スミルハン・ラディックがデビューしてから現在までの間に彼自身と家族のために建てた——設計の詩学のマニフェストを含意する——一連の建物に、新たなピースが加わった。その始源となったチカの家(1997)は、時の経過を耐えるにはあまりに小さく混成的だった。続くA邸(2008)は家族のための古い家で、空き家だった間に傷んだ建材が忍耐を象徴し、新たな用途に開かれることで刷新される一族の歴史の物理的な証となっている。2011年の地震で倒壊したA邸の跡地に、「直角の詩」のための家(2012)が建てられた。そこでは理論が堅固なフォルムをまとう。家の周囲には付属する建物群——石の庭、プール、透明な家、エネルギー・タワー——が現存する。

妻マルセラ・コレアの彫刻アトリエのために、スミルハン・ラディックは究極の元型たる周壁という最大限に抽象化した道を選んだ。

囲むという行為はさまざまに表現される。壁、垣根、柵、堀は、いずれも土地もしくは物質的空間の一面を識別し、占有する行為を表わす。この古い身振りによって、内側にあるものと外側にあるもの、われわれと外界との境界画定と分離が明示される。囲いを通して限界、境界、侵犯し得る空間の概念が具体化する。ある場との特別な関係が確立される。人間が周りを取り囲む自然と自分との関係を規定する占拠の原理に、明確な実体が与えられる。

マルセラ・コレアの野外アトリエはごく少数の必要な要素からなり、場、その地勢、その植生、地理学的状態との間にできた特別なバランスを語りかける。壁の規則的な動きは、石でできた水平線を描く。1本の連続線は、土地の起伏などの変化に無頓着で、繁茂する自然を横切り、その物理的存在を主張する。乗り越えるべき障害物だが、視界を制限しない。

周壁という当初からのアイデアは、2つめの囲まれた空間によって強調される。矩形平面の「閉じられた庭」は彫刻アトリエの壁とぶつかり、それと交わる角に回転ドア



断面図



1階平面図



工事現場 | 2016年12月8日

の動きから独立し、建物の奥行きに連続してバリエーションを生む。それによって同じ階にまったく機能の異なる活動を迎え入れることができた。

その成果は空間の滑らかな連続であり、その中で多様な機能が代わる代わる現れ、間に中庭が置かれている。ファサードの仕上材としての広範なガラスの使用、特別にはっそりした構造、ガラス張りの1階によって、新築部分の浸透性と透明性が強調される。中庭側の立面はシンプルに仕上っている一方、外側のファサードは連続するテラスと金属メッシュが特徴的だ。これは空調機能を取めるほか、都市に対するファサードとキャンパス空間とのフィルターとなる。拡張計画の他の部分と調和した蛇行するフォルムは、学生寮の建物にも、楕円形に近い10層吹き抜けの中庭にも、レクリエーション・センターにも見て取れる。レクリエーション・センターのブロックには、地下階にプール、3階に体育館が置かれる。

SANAAの設計案はボッコーニ大学の新たなアイデンティティにふさわしいシンボルとして提示され、都市の重要な一面を再生する契機として提案された。この挑戦が成功したかを確かめるため、もどかしい思いと多くの期待を胸に工事の進展を待つことにしよう。

作品：ボッコーニ大学

設計：妹島和世+西沢立衛/SANAA

設計チーム：棚瀬純孝, Francesca Singer, Nicolò Bertino,

Lucy Styles, Giulia Bovolenta, Serena Di Giuliano

ローカル・アーキテクト：Costa Zanibelli Associati

エグゼクティブ・アーキテクト：Progetto CMR Engineering

Integrated Services srl

マスタープラン・都市計画：FOA – Federico Oliva Associati

構造コンセプト：SAPS

構造設計：Studio di Ingegneria Pereira

学術的支持：ミラノ工科大学

設備：Advanced Engineering srl

防火：Silvestre Mistretta

安全：Soluzioni srl

サステイナビリティ・LEED 認証：Giuliano Dall'O

建築主：Università Commerciale Luigi Bocconi, Milano

スケジュール：設計競技 2012年/設計 2012-16年/

施工 2016-19年(予定)

C A S A B E L L A J A P A N レ ク チ ャ ー

建築家はどのように世界を見つめたか

——建築500年のよみなおし

横手義洋

第2回——アイデアは永遠に

理想都市

いきなりクイズです。オーストラリアの首都はどこでしょう？この手の設問は、あきらかにシドニーやメルボルンといった大都市でひっかけを狙っているわけですが、建築を学ぶ者なら迷いなく答えられるはずです。正解はキャンベラ。20世紀を代表する計画都市として、建築の講義等で見聞きしたことと思います。とりわけ近現代において、国家をしっかりと機能させるために首都は欠かせない存在です。通常は、国一番の大都市が首都機能を担いますが、体制一新の強い要望がある場合、もろもろの政治判断を経て、まったくあらたに首都が計画されることがあります。ブラジルの首都ブラジリアもキャンベラと並ぶ20世紀の計画都市ですが、名前が名前だけにあまりクイズのネタにはならないかもしれませんね。さらに歴史を遡れば、ニュー

デリー、オタワ、ワシントンDCなど、近代国家が欲してきた理想的首都の例は結構あります。日本でも明治以降の首都は変わらず東京ですが、さらなる理想的首都を求めた移転構想が過去に何度か持ち出されたことがあります。

こうした首都計画には国家レベルの壮大な理想が付いて回るので、計画者として実施にコミットできればこのうえない業績になります。一人の建築家が手がけられる作品として、計画都市を超えるスケールのものはないのですから。計画都市が建築家の作品になる場合、作家性のわかりやすい特徴に、平面のパターンがあるように思います。たとえば、ブラジリアはルシオ・コスタの作品と言えますが、計画の全体は、鳥のような、飛行機のような、はたまたトンボのような形状になっています。鳥の頭部に当たるところに国家の意思決定をする議事堂や行政府が置かれ、首都の背骨を形づくります。この中心軸に直交する鳥の翼部分が、大使館等が配置される住宅エリアとされました。[Fig.1]

ブラジリアの都市計画は象徴的な形態が採用された点で、その他の首都計画とは一風変わった存在になります。というのも、通常の都市計画では、もっと抽象的な幾何学形態が採用されることのほうが多いからです。建築

家ウォルター・バーリー・グリフィンが手がけたキャンベラを見ると、都市構造としては、円形、六角形の街路パターンが際立っています。グリフィンは幾何学と自然を組み合わせながら全体をまとめました。首都の中心に位置する湖は、もともとの地に流れていた川をせき止めてつくった人工湖です（湖の名は首都を計画した建築家から取られています）。この水辺を挟み込むように、都市の核が複数配置されます。南には国会議事堂を核として、同心円状の政府関連街区が広がります。これがキャピタル・ヒル。北には一般市街の核としてシティ・ヒルがあり、ロンドン・サーキットと呼ばれる六角形街路が取りまきます。キャピタルとシティを冠した2つのヒルが、現状、南北キャンベラの二極と言ってよいでしょう。ただ、航空写真を見てわかるように、グリフィンは、防衛関連施設を集めるラッセル・ヒルを第三の核とし、これら三極を頂点とする巨大な正三角形をキャンベラの大きな都市構造としています。[Figs.2,3]

都市計画の理想として表出する強い幾何学性は、近代国家の首都計画に限った特徴ではありません。いわゆる理想都市の系譜は15世紀ルネサンスにまで遡り、キャンベラに見たように、円形もしくは多角形を全体構造とする中心のある都市が描かれました。ルネサンスの建築家



Fig.1:ルシオ・コスタ | ブラジリア計画、1957



Fig.2:ウォルター・バーリー・グリフィン | キャンベラ計画、1912 | キャンベラ首都計画の実施は長期に及び、整備が本格化したのは1950年代からである。設計者グリフィンは国際コンペによって選ばれた。ちなみに、2等案はフィンランドのエリエル・サーリネン。



Fig.3:ロマルド・ジュルゴラ | オーストラリア国会議事堂、1988 | 戦争記念館より議事堂を望む。国際コンペによって選ばれた議事堂は、建物のほとんどがキャピタル・ヒルに埋め込まれるようにつくられた。1988年は、イギリス人がオーストラリアに入植して200周年でもあった。手前に見える白い建物は、1927年に完成した旧議事堂で、現在は博物館となっている。

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。
copyright© 2007-2017 Arnoldo Mondadori Editore
copyright© 2007-2017 Architects studio Japan

たちは、実現するかしないかはともかく、ひとつの理想的モデルとして、整然とした幾何学パターンを構想したのです。構想を完全に実施できた例はけっして多くありません。数少ない実施例のなかで、イタリア北東部にあるパルマノーヴァがもっとも有名なものでしょう。中心にある六角形広場から、外側三方向に主要道路がのびています。この三方向が都市の骨格となるため、全体は九角形をなしています。16世紀末にヴェネツィア共和国の領域防衛を目的に計画された軍事拠点であるため、都市の規模はさほど大きくはありません。イタリアには、ほぼ同じスケールの理想都市がシチリアのグランミケーレにも実現されています。こちらは六角形の中心広場から6本の主要道路が放射状にのび、全体もきれいな六角形構造を形づくっています。[Figs.4, 5]

アイデアの探求

ルネサンスから20世紀まで、理想都市の平面形状には基本的な図形が用いられていました。しかし、なぜ建築家の理想はこうした図形で示されるのでしょうか。この問いに対して、中心から最短で外周市壁に到達できるとか、直線街路の見通しが効果的であるとか、円滑な交通計画が必要である、とかいった実用上の説明を持ち出すこともできますが、それでも、全体形状がなぜ正多角形でなければならないのか、なぜ厳格な同心円構造を取らなければならないのか、に対する十分な説明にはなっていません。むしろ、そうした実用要件以上に、幾何学が導く完全な世界への信奉が建築家を突き動かしていました。

これは一種の職能的な性^{さが}と言ってよいのかもしれません。そもそも建築家という職能が確立した際に、混沌に秩序を与えるのが建築家の役割とされたからです。そして、こうした考え方の背景には、古代の哲学者プラトンの思想に対する再評価の動きがありました。建築家の役割をも決定づけたルネサンス思想の流れを、新プラトン主義と呼びます。

プラトンは、有象無象の現実世界を超越する完全な存在に注目し、それをアイデアと呼びました。そして、新プラトン主義に感化されたルネサンスの建築家たちは、このアイデアに従い、現実の理想化をめざします。理想的アイデアはそもそも目には見えないはずですが、それではあまりに現実との接点がなくなるので、さまざまな形のなかでも、

円や、正三角形、正方形といった正多角形に、他とは違う超越的な役割が与えられるようになりました。理想都市に基本的図形が用いられたのは、アイデア投影の跡と見ることができます。

建築家は自らの手によって生み出される大小の世界（都市から建築まで）すべてに幾何学を駆使し、混沌とした現実には秩序を与えたわけです。ちなみに立体で言えば、正多面体に特別な意味を見たのもプラトンでした。すべての面が正多角形で構成される正多面体は、正四面体、正六面体、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類しかありません。この希少性、神秘性をプラトンも、放っておけなかったのでしょう。5つの正多面体は、俗にプラトン立体とも呼ばれ、現代に至るまで、多くのプラトン主義者たちを魅了してきました。

理想や秩序を追求する過程において、幾何学を含む数学は大いなる手がかりとされました。プラトンのアイデア論を数学的に補強したのは、同様に高名な哲学者・数学者であるピュタゴラスの教えと言われています。事実、新プラトン主義、ルネサンスの建築家たちにとっても、数的調和の理論がそのまま建築の設計論に応用されたくらいです。ピュタゴラスは、耳に心地よい調和音の振動数比が簡単な整数比であることに気づきました。たとえば、1オクターブちがう2つの音の振動数比は1対2である、と。このほか、2対3、3対4といった調和音も発見されていきます。建築家たちにとって、こうした数の法則は、一種普遍的な真理を示しているように思えました。耳に心地よい法則は、目にも心地よい効果をもたらすはずと、視覚操作の手がかりにもなりました。結果、簡単な整数比に基づく基本的図形が理想的建築のベースになっていきました。

初期ルネサンスの建築家にして理論家でもあったレオン・バッティスタ・アルベルティは、著書『建築論』のなかで、新プラトン主義的な数的秩序の重要性を説いています。アルベルティの建築論が引き金となって、続く多くの建築家たちも数学を駆使した調和の理論を同様に展開するようになりました。16世紀の建築家アンドレア・パラーディオの『建築四書』は、地元である北イタリア、ヴェネト地方のみならず、イギリス、ドイツ、アメリカの建築家たちにも広く読まれ、支持を集めました。ここにも数的調和理論がしっかりと踏襲されています。西洋世界におけるルネサンス建築理論の展開をたどるだけでも、建築における新プラトン主義の影響がいかに根強かったかが理解できますよね。



Fig.4:パルマノーヴァ、1593



Fig.5:グランミケーレ、1693 | 地震後に急ぎ整備された計画都市。シチリア島南部、内陸部に立地。

中心のある世界

建築の歴史で、ルネサンスは15世紀のイタリアにはじまると習います。これを期に何が変わったのでしょうか？ ごくごくシンプルに言うなら、人間の知性に強い関心が寄せられました。それ以前の中世の世界観はもっぱら創造主である神の存在を中心に安定していたのですが、ルネサンスは再び古代人の叡智を呼び戻す一方、創造の立役者として人間の業績にもフォーカスするようになりました。偉大な神への信奉はそのままに、今まさに生み出されようとする秩序ある世界、すなわち、建築の創造行為も偉大な業績として評価するようになったのです。建築家の仕事は、ある意味で神の仕事の肩代わりでした。こうして、人間の才知が表立って評価されるようになりました。建築史の教科書に、ルネサンス以降、建築家の名前がズラと出てくるのはそうした理由からです。